

真福寺大須文庫所蔵『林葉鈔』の検討

佐藤もな

一 はじめに

大須観音宝生院真福寺文庫（以下、大須文庫）に『林葉鈔』と題された一帖の写本が存在する。⁽¹⁾ 管見の及ぶ限りでは、『林葉鈔』の名を持つ文献は他所に確認できず、『林葉鈔』について検討した研究はこれまでみられない。現存するのは上巻のみで奥書を欠くため、成立年代や書写状況は不明である。現存表紙には本文と別筆で「道範記禅林寺静遍説」とあり、京都禅林寺に住した静遍（一一六六―一二二四）の説を、その弟子である道範（一一七九―一二五二）が記したとみなされている。

『林葉鈔』という題名の文献が静遍や道範の著作として存在した事実は目録上では確認できないが、類似するものとしては、恵範『諸師製作目録』や謙順『諸宗章疏録』などには『海心林葉鈔』上下二巻という文献名が、道範の著作として挙げられている。⁽²⁾ 題名から推測すると『海心林葉鈔』は、道

範の教学上の師である覚海（一一四二―一二三二）と静遍の説を記した著作と思われる。また、印融（一二四五―一五一九）著『古筆拾遺鈔』巻一には「林葉鈔下^{道範}云」とする引用がみられる。⁽³⁾ そこで本稿では『林葉鈔』の内容を精査し、静遍や道範の思想との関連性、及び著者が道範である可能性を検討するとともに、『林葉鈔』の文献的価値について考察したい。

二 『林葉鈔』の書誌的概要

大須文庫所蔵『林葉鈔』の書誌的概要は、以下の通りである。

〔外題〕林葉鈔 上〔内題・尾題〕ナシ〔頁数〕一帖〔装丁〕モト粘葉装、仮綴〔料紙〕楮紙打紙〔法量〕縦二三・一糎、横一六・八糎〔紙数〕一六紙〔行取り〕一頁九行、一行二二字前後〔状態〕後欠、小破〔備考〕表紙右肩に墨書「共三」、右下に「第七十合」、左下に「□喩」⁽⁴⁾、表題右下に「道範記 静遍説」。第一丁表に「尾張国大須宝生院経蔵図書

寺社官府照点檢之印」（方朱印、丸印）あり

第一丁表には、各問答の題名が列記されている。便宜上、括弧つき漢数字を私に付して列記する。（一）真言宗修行地位断惑成仏事、（二）自家地前地上三劫廢立事、（三）初發心時便成正覺事、（四）自家十界互具事、（五）真言教主事、（六）理智法身説法事、（七）顯密教相大綱事、（八）第十住心淺略事、（九）顯密本有仏性差別事。

紙数の制約から内容の詳述はできないが、項目名からも明らかのように、『林葉鈔』は断惑論、教主論、仏身論といった真言教学上の重要な問題について論じられている文献である。

三 『林葉鈔』の成立背景

先述の通り本書は奥書を欠いているが、成立状況を推定できる記述が本文中に二箇所存在する。まず（一）「真言宗修行地位断惑成仏事」では、『大日経疏』や『菩提心論』などの文献に見られる断惑論についての解釈が論じられた後、以下のような一文がある⁽⁵⁾。

如^レ上自宗大義也。中御室御時、召^二高野明德^一有^二秘密談義^一。其聞書五卷、中^ノ義也^云。

この「中御室」とは、白河天皇（一〇五三―一二二九）の第三皇子であり、仁和寺に住した真言僧である覚行法親王

（一〇七五―一一〇五）と思われる。覚行法親王は応徳二年（一〇八五）に仁和寺にて出家し、康和元年（一〇九九）に法親王となった人物である。このことから『林葉鈔』の著者は、当時の仁和寺における談義の様子を知ることができる人物であると考えられる。静遍、道範はともに仁和寺の法流を汲んでおり、特に道範は在世当時に仁和寺法親王であった道助（一一九六―一二四九）と懇意であったなど、仁和寺との関わりは深い。このことから、道範がこの文章を記したと考えても不自然な点はない。

また（九）「顯密本有仏性差別事」では、天台における三因仏性の義、不縦不横の義と真言教学との違いが論じられた後に、次のような記述がある。

此義、禪林上徳、对^二天台當時明請^{明禪成覚}精誦時、皆以承伏^{シテ}理実爾^云。

この傍線部「明禪」とは天台僧で京都山城に住した明禪（一一六七―一二四二）、「成覚」は同じく比叡山西塔の天台僧であった成覚房幸西（一一六三―一二四七）であると思われる。このことから、文中の「禪林上徳」は、明禪・成覚と同時代に禪林寺に住していた静遍である可能性が高いと考えられる⁽⁶⁾。周知の通り、明禪・成覚はともに法然に帰依した人物であり、静遍も真言僧でありながら法然の念仏義に影響を受け、念仏や極樂往生について論じた『統選択文義要鈔』を著

した人物である⁽⁷⁾。記録は残されていないが、両者は法然流の浄土思想を通じて接点があった可能性も考えられよう。

四 静遍・道範説との関係

『林葉鈔』には、静遍や道範の説いた教学と共通する点が複数みられる。以下に見ていきたい。

第一点は、いわゆる三点説を用いた仏身論である。三点説とは醍醐寺の教学を淵源とし、静遍から道範に継承された、きわめて特徴的な説である。先行研究から簡略に述べるならば、理・智・事の三点に七・八・九識、方位、五智など様々な範疇を対応させ、理智が具足し、事点である人を密教の教主とする点に最大の特徴がある理論である。『林葉鈔』では、この三点説を説いている箇所が三箇所存在する。以下、順に挙げる。

内九八七識自証三菩提三点也。九^ハ理、八^ハ智、七^ハ事也。〔理智冥合也〕此三者、彼此同如ノ事也。此三智^ハ不^レ見^レ外故衆生無^レ益、大悲故住^ニ加持身^一者、是妙觀察邪正分別門ノ前也。是六識心外故是アミタ也。示^ニ種々諸趣所喜見身^一者尺迦也。前五識成事作業也。是衆生感見ノ仏体^ハ皆是妙觀察アミタ也。

(四) 自家十界互具事、九オ^ウ今許^ニ自家諸仏内証外現説法次第^一、有^ニ三位^一。一本地自性法身。二能加持身。三所加持身也。是^ハ内三点九八七識中東南心内三身、大日自証三菩提。此為^ニ本地^一。西方妙觀察智分別邪正以^ニ見仏^一与^ニ

真福寺大須文庫所蔵『林葉鈔』の検討(佐藤)

衆生^一故、発^ニ大悲^一住^ニ加持^一。是淨仏国土位也。是為^ニ能加持報身^一アミタ。次現^ニ無尽莊嚴所加持心化身^一尺迦為^ニ成就衆生位^一。此即如^ニ次秘密壇、嘉会壇、大悲壇也。〔五〕真言教主事、一〇ウ問。自家心理智法身説法者、理智ノ法ノ位^ニ即各説法^ル歟。如何。答。理智^ハ所説ノ法也。能説者^ハ即自性ノ人也。性淨円明ノ三転^ニ中^一、理、東^ハ智、南^ハ理智具足ノ人也。以^レ此人為^ニ能説法主^一。以^ニ第二^一并^ニ為^ニ大日種子^一是義也。此三転不離故、云^ニ理智法身説法^一。

(六) 理智法身説法事、一二オ

これらの記述では、心内の理・智・事にそれぞれ九・八・七識、中・東・南を対応させており、また理と智は所説の法であり、能説は理智具足の人であるとする。また、心外の第六識は、妙觀察智であり能加持報身である阿弥陀仏、前五識は、所加持身である釈迦に対応している。図示すれば以下のようになる⁽⁹⁾。

『林葉鈔』における三点説

心外	心内			事	智	理	三点
	釈迦	阿弥陀	妙觀察智	成所作智	報身	能加持身	所説法
前五識	※北	西	南	東	中	秘密壇	曼荼羅
第六識	大悲壇	嘉会壇	能説人	教主	所説法	曼荼羅	曼荼羅

三点説が説かれていることで、既に『林葉鈔』が静遍・道範の教学の流れを汲む文献であることがうかがえるのであるが、その内容を詳しく見ても、静遍や道範の著作に見られる三点説⁽¹⁰⁾と異なる点がないことがわかる。

共通点の第二点は、「実行当機」に関する問題である。「実行当機」は大日如來の自性会に、未だ悟っていない因位の者が存在するのかどうかという問題である。真言古義・新義兩派に共通する論議の算題となっており、古義では「自証会因人」といわれる。『林葉鈔』では、この実行当機に関して次のように述べられている。

問。彼悟人次第如何。答。大日本地法身住^ニ此自証三菩提^ニ時^ハ衆生無益故、住加持身^一能加持^ニ現瞿曇^ニ等^一々所喜見身^ニ入^ニ法界門^一。
 …(中略)…此能加持身、説^ニ普門三密^一。依^レ此行者、得^ニ証自心^一普門法界。即是行者平等智身者是也。此即入^ニ自心塔^一、見^ニ已成仏^一法界塔^一、彼此同自性本地本有法然^ノ法界円塔故与^レ仏平等也。此本地身^ノ位^ニ無^ニ実行機^一之義也。(四) 自家十界互具事、九オ)

傍線部の通り、ここでは大日如來の本地身の位において、実行の機根がないという結論となっている。これは道範が『大日經疏遍明鈔』卷一、三で静遍からの「相承一義」として述べている内容と同じ結論である。実行当機の人無しとする立場は主に新義派にみられるものであるが、古義派では道範がこの立場を取る。『林葉鈔』では前述の通り三点説が論じられていることから、『林葉鈔』が新義派の学僧の著作とは

考えにくく、この説は道範のものともてよいであろう。

共通点の第三点は、道範独自の譬喩表現である。『林葉鈔』(四) 自家十界互具事では、真言教学における十界互具を、味噌など様々な調味料を入れて作った「冷汁」に譬えた表現がみられる。

冷汁^ヲニテ^ミ喩^ヲ以^テ可^レ得^レ心。辛藜塩梅「酢也」曾酒等合。故其味其性各別^ニシテ而同時ナリ。是為^レ美。如^ニ仏同時顕十界^一。衆生ハ或時ハ只嘗^レ藜謂^レ辛、或時乍住^レ酢^ニ為^レ酸^ニ云。此喩ハ近俗歟。醍醐^ノ衆味具足以^レ之可^レ類^ニ云。

(四) 自家十界互具事、八ウ)

これと同様の表現が、道範と覚阿との問答集である『覚阿問答鈔』卷上「如実知自心之後不捨生死事」の、道範による答えの部分に存在する。

如実知自心ノ後ハ十界同時^ニ起^{シテ}自利利他スルナリ。此義ハ十界同時^ニ次第^ヲ並^テ令^レ縁^セ故、余九界ハ被^テ照^サ一切智光^ニ成^ルナリ。日出物^ト也。云^ニ此義^一多々味^ニ云^フ事アリ。寒汁^ヲ造^ニ塩酢等^一物合成スレハ出^ニ美^一味^一。此即如來十界万徳同時^ニ具足起用スル義亦復如^シ此ノ。彼ノ十界ノ同時具足^{スル}事ハ大日法身万徳ノ目出^キ物ナレハ、此ノ事^一ヲモ闕スレハ万徳ノ義不^レ成。此ノ多々味ノ義モ不^レ成也。

〔梅尾コレクシヨシ〕顕密典籍文書集成』教相篇一、五七九(五八〇頁)

『覚阿問答鈔』では「寒汁」となっているが、十界互具を、調味料が混然として美味を為す汁に譬えている点は同様である。『林葉鈔』では汁の中の様々な味の一つに偏っている状

態が衆生に譬えられており、大日如來の万徳を汁の「多々味」に譬える『覺阿問答鈔』より具体的な面もみられる。なおこの譬喩は、『覺阿問答鈔』の略本と思われる⁽¹²⁾『覺範問答』の注記においては道範独自の「多々味宗義」とされ、道範と同時代に高野山の学僧であった法性⁽¹³⁾（一二四五）の「サイノ目宗義」とともに紹介されている。

五 まとめ

以上、これまで考察したことをまとめると以下の通りである。

・『林葉鈔』の成立年代は早くても一三世紀前後であり、本文中の「禪林上徳」は静遍である可能性が高い。

・『林葉鈔』では静遍から道範に継承された三点説が用いられ、内容は静遍説・道範記とされる著作と一致する。「実行当機」についても道範『大日経疏遍明鈔』に説かれる静遍相承の説と一致し、実行当機の人無しという立場を取っている。三点説を用い、実行当機の人無しの立場を取る人物は、確認できる限りでは道範のみである。

・(四)「自家十界互具事」における冷汁の譬喩（多々味宗義）は、『覺阿問答鈔』の道範による答の中で同様の文章がみられ、道範独自の譬喩と思われる。

以上の検討結果から、『林葉鈔』は写本表紙の記載通り、

真福寺大須文庫所蔵『林葉鈔』の検討（佐藤）

静遍説・道範記の文献である可能性が極めて高いといえる。下巻が失われているため、印融『古筆拾遺鈔』における『林葉鈔』下巻引用部分は残念ながら確認不可能であり、全容は不明ではあるが、大須文庫蔵『林葉鈔』には、今回紹介した部分以外にも天台教学と真言教学との相違など、従来知られていた道範著の文献には見られない内容が、簡潔ながら論じられている。『林葉鈔』は今回新たに確認された、静遍や道範の思想がうかがえる重要な資料の一つであるということができよう。

従来、道範とその周辺の思想については翻刻出版されたテキストを中心に検討がすすめられ、未翻刻の資料についてはほとんど検討されてこなかった。しかし百部前後に及ぶと思われる道範の著作は大半が未翻刻であり、道範の思想を総合的に解明するためには、今後、未翻刻資料も含めた検討を進める必要があると考える。今回の考察を一例としたい。

1 函架番号は第七〇合一七号。本稿作成にあたっては、国文学研究資料館所蔵のマイクロフィルム紙焼、および大須文庫所蔵の『林葉鈔』写本を参照した。

2 『諸師製作目録』（日仏全旧版二、二〇頁下、同新版九五、三四頁中）、『釈教諸師製作目録』卷二（日仏全旧版二、二〇頁下、同新版九五、三四頁中）、『諸宗章疏録』卷三（日仏全旧版一、九三頁下、同新版九五、一〇三頁下）。ただし『海心林葉鈔』

真福寺大須文庫所蔵『林葉鈔』の検討(佐藤)

八八

の書名を持つ文献は未発見であるため、『林葉鈔』がこの『海心林葉鈔』に該当するかどうかは、現時点では検討不可能である。

3 『真言宗全書』一八、二八四頁下～二八五頁上。

4 □は虫喰。

5 漢字は適宜現行の字体に改め、丁数は私に付した。以下すべての引用で送り仮名は原文の通りとし、傍線、句読点、返点は筆者が適宜補った。

6 『禅林寺誌』(法蔵館、一九一四)によれば、静遍の前には法然(一一三三～一二二二)、後には証空(一一七七～一二四七)が禅林寺座主とされているが、法然や証空が「禅林上徳」と呼ばれて法然門下の僧達に真言教学を説いた可能性は低いと思われる。静遍は建保六年(一二二八)から高野山蓮華谷の往生院に住持していたが、『本朝高僧伝』一三、『続伝灯広録』一四によれば、少なくとも静遍は承久三年(一二二二)から没年である元仁元年(一二三四)までは禅林寺座主であったようである。また、文書類では『続宝簡集』一二所収の貞応元年(一二二二)七月御影堂御物目録に「禅林寺僧都静遍」との記載が見られ、以後、静遍に「禅林寺」の呼称が付される文書がみられるようになる。

7 『続撰釈文義要鈔』三巻の詳細については石田充之「密教系浄土願生者静遍僧都の浄土教的立場」(『龍谷大学論叢』三三六、一九四九)参照。

8 三点説を直接取り扱った論文としては石田充之「静遍僧都の浄土教」(『法然上人門下の浄土教学の研究』下巻第六篇、大東出版社、一九七九)、中村正文「禅林寺静遍の提唱した教学について——特に教主論を中心として」(『高野山大学論叢』二六、

一九九一)、熊田順正「静遍浄土教に見える七八九識説についての考察」(『仏教学』四八、二〇〇六)等がある。

9 表中の※印は、『林葉鈔』(一)真言宗修行地位断惑成仏事に記されている対応関係から補ったものである。三点説に直接言及した箇所ではないため、本文は省略した。

10 三点説は主として静遍『秘宗文義要』、道範『貞応抄』『大日経疏遍明鈔』などの著作にみられる。注7前掲論文、拙稿「道範の教主義について——静遍説との関係を中心に」(『日本仏教総合研究』五、二〇〇六)等参照。

11 『続真言宗全書』五、一〇八頁上、一四三頁上～下。

12 『覚範問答』は高野山三寶院本(高野山大学図書館蔵、天保元年写)のみ存在する。全三二項目中二五項目が『覚阿問答鈔』に対応しており、同書の草稿本または抜粋の可能性が高い。詳細については機会を改めて検討したい。

13 「恭云、是レ古来道竹阿闍梨ノ多々味宗義ト云事欤」。『覚範問答』「如実知自心之後不捨生死否事」、高野山三寶院本一三ウ。

〈付記〉本稿を作成するにあたり、真福寺宝生院岡部快圓様、長谷川快眞様、御当局様に『林葉鈔』写本の閲覧、本文引用・論文掲載を御許可頂き、様々な御高配を賜った。心より感謝申し上げます。次第である。

〈キーワード〉 真福寺、『林葉鈔』、道範、静遍、三点説

(帝京高等看護学院非常勤講師)